二次元ドリームノベルズ47
サンダークラップス3
THUNDER CLAPS
カオスアリーナ
小説 羽沢 向一
挿絵 せんばた楼
試し読み版

第一章　銀座の英雄たち（ヒロイックライフ・イン・ザ・ビッグシティ）　006
第二章　極限の闘争（インフィニティ・バトル）　028
第三章　究極の欲望（マクシマム・セクシャリティ）　066
第四章　陵辱の時（エロ・アワー）　119
第五章　魂の戦い（アワー・ソウルズ・アット・ウォー）　173
終幕　伝統の継承者（ワールズ・ファイネスト・ガールズ）　224

登場人物紹介

Characters

スノーウィング（ジャスティス・サーカス）
本名は大空美紀（おおぞらみき）。元は新人アナウンサー。

セメタリー（ジャスティス・サーカス）
本名は南條志野（なんじょうしの）。ミスター・シャドウの能力を引き継いでいる。

シルバー・バレット（ジャスティス・サーカス）
超音速で闘う、日本最速のスピードスター。

マダム・スクロール（ジャスティス・サーカス）
様々な魔力を秘めた巻物を駆使する、神秘の麗人。

フレア（サンダークラップス）
本名は日向燦（ひゅうがきらら）。ドクター・ディスオーダーに作られた人造人間。

スターサンダー（サンダークラップス）
本名は鈴堂麗（りんどうれい）。チームのリーダー。電流を自在に操る。

ローズデバイス（サンダークラップス）
本名は北原静子（きたはらしずこ）。体内にナノマシンを宿した少女。

オセロット（サンダークラップス）
強力な魔術を操るシャーマン。戦闘時は山猫の獣人に変身する。

キャプテン・スカイ
本名は鹿島健吾（かしまけんご）。日本最初のスーパーヒーロー。

ミスター・アンフェア
本名は南條周平（なんじょうしゅうへい）。セメタリーの父親。

ミルククラウン
ダーク・アリーナを主催する犯罪組織のボス。

ストーリーテラー
他人の肉体を書き替える言霊（ことだま）使い。

「起きるんだよ、白鳥ちゃん」
白い指先からなにかが放たれ、スノーウィングのまぶたが持ち上がった。状況を把握できないでいるもうひとりのヒーローに、美青年が微笑みかける。
「フレア君の大きなモノを、きみの指と口でかわいがってやるんだよ」
盛り上がったミニスカートに向けられたスノーウィングの瞳が丸くなる。
「ああっ！　これは、まさか」
驚愕の視線から逃れようと、フレアは顔をそむけて懇願した。
「お願い。スノーウィング、見ないで」
「あ、ご、ごめんなさい、フレアさん」
スノーウィングもあわてて背を向けようとする。だが、肩をダムドビートルにつかまれる。フレアの下から引きずり出され、床に下ろされた。フレアの両脚の間にひざまずかされる。赤面する女子アナの目の前に、スカートの盛り上がりがきてしまう。
うつむくスノーウィングの涙声が、当惑するフレアの耳に入った。
「本当に、ごめんなさい。どうにもならないの」
「ジャスティス・サーカスの一員であるあなたが、どうして、こんな奴の言いなりに」
「ダーク・アリーナの者たちが、どこかの小学校に爆弾を仕掛けて、反抗すれば爆破され

てしまうの」
「そんな……」
フレアは絶句して、やがて、ゆっくりとうなずいた。
「わかったわ。わたしのモノにして」
「フレアさん」
先輩ヒーローの言葉に、スノーウィングが顔を上げた。年齢は女子アナ一年生のスノーウィングのほうが上なのだが、胸や尻が小ぶりなこともあって、いまは幼く見える。
また、同じ言葉を告げた。
「ごめんなさい」
スノーウィングの両手が恐る恐る前に出て、フレアのコスチュームのミニスカートのすそを指先でつまんだ。ゆっくりとすそをめくると、スノーウィングとフレア自身の目に異様な光景が飛びこんだ。
ボディスーツの股間が、高々と押し上げられている。もともと伸縮性の大きい素材が、フレアが放出した乳液に濡れてぴったりと貼りつき、ふくらんだ亀頭の形状をくっきりと見せつけた。
フレアの勃起の大きさは、スノーウィングの恋人であるキャプテン・スカイこと鹿島健

吾のものと匹敵した。女らしく引きしまったウェストとは対照的に、猛々しいまでに太く、長い。

しかも、剛直の下には、興奮して口を開きかけた肉唇の形が浮かび上がっている。

スノーウィングの指が、そっと濡れたボディスーツの端をつまみ、横にずらした。

「おうっ！」

布とこすれた衝撃に、フレアが喘ぎを発する。押さえられていた肉棒が激しく跳ね上がり、スノーウィングの眼前に突きつけられた。思わず、女子アナが感嘆の声を洩らす。

「ああ……」

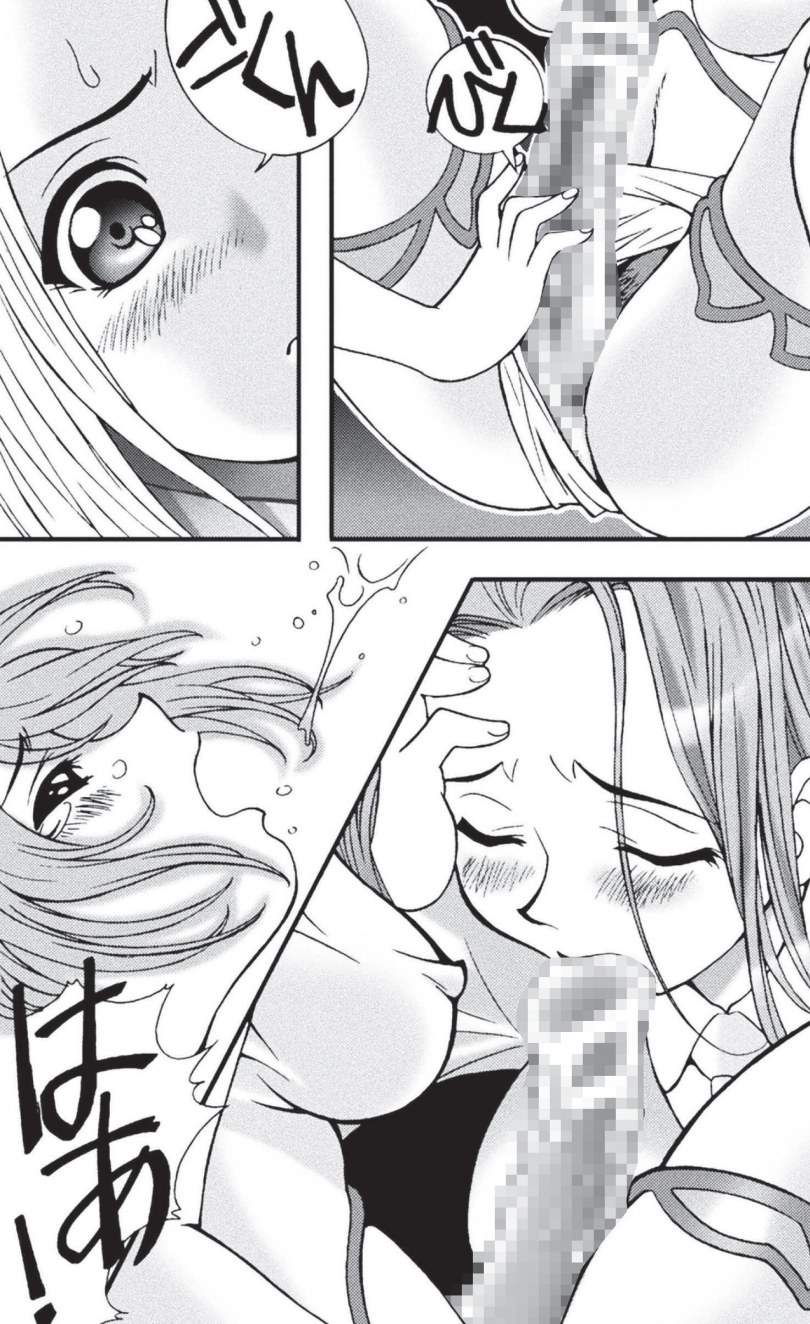
ため息を吐きながら、スノーウィングはしげしげと見つめてしまう。露出すると、いまにも射精しそうなほどぎちぎちに勃起した男根と、黄金虫のために早くも蜜を流している女陰とが、きれいに上下に並んでいるのがわかる。秘唇の上部には、膨張した陰核が顔を出している。

スノーウィングがボディスーツを肉棒の根元にひっかけて指を離すと、強い伸縮力を持つ白い布が、女の肉の狭間にきつく食いこんだ。

「あうっ」

女肉をコスチュームでこすられる衝撃と快感に神経を灼かれ、フレアは同性に秘部を凝

視される恥ずかしさに耐えられずに懇願した。
「……お願い。スノーウィング、は、早くして……」
「は、はい。フレアさん、失礼します」
細い指が、勃起の幹に触れた。
「んくっ！」
フレアの背筋がソファに押しつけられる。椅子のきしみとともに、女子アナの声があふれた。
「ああ、熱い」
「あ、あう……は、早く……」
「はい」
スノーウィングが顔を下げ、唇をひくつく亀頭の先端に触れさせる。熱い電撃が、唇から亀頭へ伝わり、肉の幹へと走った。
「ひいいっ」
触れられていない女の秘唇が大きく開き、肉襞がざわざわと動きはじめた。奥の源泉から、どぷっと愛蜜があふれ出てくる。肉棒のすぐ下に位置するクリトリスもさらに大きさを増して、激しく脈動した。


ぢゅん
ぢゅ
はあ！

そして、腹の中に収納されている精巣で、精液が出口を求めて渦巻いている感覚が、フレアに伝わった。

〈ああ、もう、長くもたない〉

スノーウィングが何回も亀頭へのキスをくりかえし、唾液をたっぷりとまぶしながら、舌先で鈴口をつついた。舌先が触れるたびに、フレアの首がガクガクと前後に動く。

「あっ、んっ、んく、あ、うっ……」

フレアを鳴かせているのは、スノーウィングの肉体に刻みこまれた技術だった。ダーク・アリーナで何回も陵辱調教された末に身についてしまった技術が、自然に出ているのが哀しい。

唾液で濡れそぼった亀頭が、すっぽりと女子アナの口に呑みこまれた。口内粘膜に包まれ、舌で舐めまわされる。

「うんっ、んん、うむ……」

「あふっ、はひい、あああ……」

スノーウィングは口のすべてを使って奉仕しながら、右手で幹をしごくことを忘れない。相手が普通の男なら、左手で睾丸も愛撫するところだが、フレアにはついていない。かわりにひくつくクリトリスの包皮をたくみに剥き、指先でつまんでさすった。フレアの声が

さらに高くなる。
「ひいっ、そ、そんなところまでっ、あううっ」
これもダーク・アリーナで、他のジャスティス・サーカスの女性メンバーとレズを演じさせられ、互いに責め合わされて憶えたことだ。
「ああっ、もう、もうだめっ！　スノーウィング、だめ、出るう！」
ダムドビートルが操る魔虫によって燃え上がらされていたペニスは、ダーク・アリーナの牝奴隷の精妙な技巧によって、急速に限界に達した。フレアの腰が勝手に大きく跳ね上がり、スノーウィングの喉を奥まで突いた。
「はあああっ、出ちゃう！」
「んっ、うぐうっ」
スノーウィングはむせながらも、反射的に喉の粘膜で勃起全体を強烈に締めつける。同時に、フレアの女芯を強くひねった。
フレアの精巣が堰を切り、大量の精液を放出した。肉棒の中を精液が上昇する喜びが閃光となって、脳が真っ白に染められる。
「出るううっ!!」
「あぐっ、んんんん!!」

フレアは必死に怒鳴ると、悪党どもの手を払い、再び天井の真紅の翼を目指して飛び立った。だが、すぐにまた赤い蝙蝠がたかってきて、もてあそばれてしまう。

「うくっ、あ、む、はんっ、おあ！」

乳首や股間だけでなく、全身を蝙蝠に嬲られ、前後不覚になる。身体中のそこかしこで悦楽の噴火が吹き荒れる。快感という名の拷問で方向感覚が失われ、自分が空中でどちらを向いているのかすら、わからなくなった。再び客席に墜落しないのは、逆に蝙蝠たちがコスチュームをつかんで、浮力を与えているからだ。

「こ、このままだと、バスが」

顔にも何匹も蝙蝠が止まり、重なった翼で視界を赤く染められた。羽ばたきと甲高い鳴き声で、耳もふさがれる。目も耳も奪われて、全身の蕩けるような肉の喜びだけが、感覚を満たしている。

「あっ、ああ、だめ、大勢の人が死んでしまう……だめっ！」

「もう、時間切れよ」

声とともに、視界をふさいでいた蝙蝠たちが四方に散った。目の前にカウンテスの冷酷な笑みが浮かんでいる。

「バ、バスは」

「フレアちゃんだけが、時間切れよ。ほら」
しゃべりながら、舌を出した。先端にはもう、金の指輪がなかった。
「フレアちゃんが負けたのよ。バスはマダム・スクロールが救ったわ」
「そうか。はじめから、うっ、わたしが負けるように仕組んでいたのか」
「あら。あたくしとマダム・スクロールが最初からつるんで、フレアちゃんを陥れたというのかしら」
「マダムはそんなことをしない。おまえが勝手にやったことだ」
「ほほほほ。ルールはルールよ」
フレアは女吸血鬼に肩をつかまれた。深紅の翼が羽ばたき、無力なヒーローはステージへ運ばれる。
ステージに降ろされたフレアは、二人の蝶ネクタイの男たちに両腕を取られ、背後にまわされた。男たちは格闘技の達人らしく、きれいに腕のすべての関節を固定されてしまう。とはいえオフビートではなく、普通の人間だ。いつものフレアなら、難なくふりほどける程度の力しかない。しかし、いまのフレアには鉄壁の拘束となってしまう。
ステージ上では、すでにマダム・スクロールが同じように男たちに捕まっていた。魅力的な唇の間には、指輪が輝いている。

カウンテスの手が、無造作に唇から指輪を引き抜いた。
「インチキですわ。わたくしに指輪を押しつけて」
「ルールはルールよ。雪江ちゃんには母乳を出させてあげるわ。でも、出す場所は、こちらが指定するわよ」
「出す場所？　どういうこと、あっ」
マダム・スクロールの腕を固めた男たちが歩き出した。マダムも強引に前へ、フレアへ向けて押し出される。
「な、なにを、んんっ」
「する気だ、あうっ」
フレアとマダムの四つの乳首が触れた。過敏になった乳首がこすれ合い、ジンジンと電流が通じる。たまらず二人は同時に身震いしてしまう。すると、かえって激しく乳首がこすれ、電流が電撃となった。
「んひ」
「くうっ」
「ほほほ。遊んでいる暇はないわ」
フレアの両方の乳首が、カウンテスの手につかまれ、固定された。鋭い爪で、乳首の先

をひっかかれ、乳管を広げられる。フレアは恐ろしい可能性に気づいて声を上げた。
「ま、まさか！」
「ほほほほほ。やって」
マダム・スクロールの身体がさらに前へ押しやられた。
「や、やめろ、やめ、はあうっ」
フレアの乳首に開いた乳管の先端に、マダムの子供のペニスなみに勃起した乳首が挿入される。衝撃で乳管がきつく収縮したが、異物を押し出すことはできない。逆に、マダムの太い乳首の先端をしっかりと咥えこんでしまう。サイズが大きいマダムの肥大勃起乳首を呑んだために、フレアの乳首の先端は倍以上にふくらんでいる。こんな常識を逸したことが可能なのも、天才科学者が製作した人工の体組織ならではだ。
乳首を内側から強烈に押し広げられる特異な感覚に、フレアの歯がカチカチと鳴った。
マダム・スクロールも乳首の先端をきつく締めつけられる実際の感覚よりも、自分の乳首を他の女の乳首に挿入するという異常な事態に、神経が惑乱される。
「お願い、手を離して。もう、許して、あううっ！」
「ひいいっ！」
二人の背中が、四人の男に強く押される。ゆっくりと、フレアの中にマダム・スクロー

ルが進入していく。
「ひっ、んっ、くうう……は、入ってくるう」
「い、いや、ああ、入っていっちゃう、いやああ」
根元にはまる魔リングに締めつけられている部分も、マダムの乳首が越えた。乳輪の奥、乳房の内側へと、熟女の先端が届いた。さらに、マダムの射乳を止める妖リングそのものが、フレアの中へと侵入する。二人の乳輪と乳輪がぶつかり、密着する乳肉同士の中に埋もれた。
「あっ、ああああっ、お、大きい、マダムの乳首、大きすぎる！　壊れる、ひいっ、わたしの胸、壊れるうっ！」
「くふっ、うう、締まる、フレアの乳首が締まって、はひぃ、きつい、きつすぎますわああ！　んん、わたくしの乳首が、つぶれちゃいますわあっ！」
まるで男女の交合さながらに互いに乳首を責め合う未知の快感に、若きヒーローと熟女ヒーローがともに身体をうねらせ、のたうった。
「あくう、う、動かないで、胸がこすられて、ああ、だめえっ！」
「ひうっ、んああ、あたくしの乳首も、はんん、し、しごかれて、たまらないっ！」
止められない身悶えが、二人して相手と自分自身を肉悦で責め苛み、いよいよ射乳の欲

求を高め合ってしまう。魔法の球で嬲られているフレアだけでなく、まだ触れられていないマダム・スクロールの秘唇もどろどろに濡れ、ワインレッドのメッシュ越しに女蜜を後から後から滴らせている。

向かい合って立ったままのたうちつづける二人を見つめ、カウンテスの赤い唇が三日月のごとく吊り上がった。

「では、マダム・スクロールの母乳の射出を許可してあげるわ」

快楽にふくらんだ胸を連結させられた二人のヒーローが、同時に叫ぶ。

「やめて。こんな状態でリングがゆるんだら」

「フレアの中に出してしまうわ。お願い、伯母さま、指輪を使わないで。わたくしに母乳を出させないで」

吸血未亡人の哄笑が高く響き渡った。凶悪な観客たちも思わず背筋を震わせる、魔界の笑いだ。全身が岩でできた鉱物人間ですら、ごつごつした身体の表面に鳥肌が立っている。

「さっきまで、あんなに出したがっていたじゃない」

「フレアをこれ以上苦しめられないですわ。お願いです。伯母さまを一度灰にした龍円儀一族に復讐したいのなら、わたくしだけを責めてくださいませ」

姪の必死の懇願も、魔物と化した伯母には意味がなかった。

「ほほほ。復讐などとつまらないことは、かけらも考えていないわ。あたくしは興味深い光景を観察したいだけなのよ」
「お願い、助けて、ああ」
ねじ上げられたマダム・スクロールの右手の人差し指に、黄金の指輪がはまった。左右の肥大乳首の根元を締めつけるリングが、そろってゆるんでしまう。胸のうちに溜まりに溜まった母乳が、乳首の中で奔流と化した。
「あああ、だめ、出てしまう！」
マダム・スクロールは意志の力をふりしぼって止めようとする。だが、肉体はとっくに限界に達していた。決壊に抵抗するのは不可能だ。
「止められない、ああ、止められませんわ」
むずがる幼児のように、熟した上半身が左右に動いた。膨張した巨乳が大きく揺れるが、肉の中に深く挿入され、きつく咥えられた乳首を引き抜くことはできない。
「フレア、だらしないわたくしを許して、ひいいっ、出る！　ああ、出ちゃう！　ゆっくり流れてますわああ！」
収縮したフレアの乳管に押さえられ、母乳は一気には流れなかった。それがまたマダム・スクロールにじれったい焦りを呼び起こす。

ついに母乳が先端の出口に到達した。
「あああ、出る!!　イク！　胸が、イキますわ、イクううっ！」
乳房の奥に達したマダムの乳首の先端から、大量の母乳が噴出し、フレアの乳肉を内側から激しくたたいた。
「うあっあああ！　出てる、胸の中に出てるう、きひいいっ!!」
もともと出口をふさがれて乳液が蓄積された乳房の中に、他人の母乳がどくどくと流れこんでくる。筆舌につくせない圧迫感が、フレアを直撃した。
「いやああ、許して、くふっ、もう、許して、止めてえっ！」
「止まらないの、おお、止められない、ああ、まだ出るう！」
新たに注ぎこまれる母乳のために、フレアの胸がいよいよ弾けそうになる。乳液を放出して、絶頂を迎えたいという欲望は、どんどん増大していく。しかし、リングが射乳をけっして認めてくれない。
マダム・スクロールの射乳が止まったのは、十数秒後だった。母乳の放出を終えた熟女が、ぐったりとフレアの肩に頬をもたれさせた。
「……はあ……あ……許して、んん……」
「ああ、わたしも」

ドピュ
ギリ

出させてほしい、とフレアは口に出しそうになり、唇をきつく噛んだ。
〈出したい。わたしもミルクを出したくてたまらない……でも、いまさら、そんなこと、言えるわけがない〉
「ひっ！」
新たな衝撃が、乳房の中で起こった。マダム・スクロールの身体が、腕を固める男たちによって前後に揺さぶられたのだ。一度は果てた肥大乳首が、フレアの狭い乳管の中をいままでにない勢いで前後しはじめる。
「いやっ、止めてください、これ以上、イキたくありません、あ、ああっ……」
自分の意思ではない強引な動きに、マダム・スクロールの感覚がついていけず、胸全体が別の生物になったように、新たな快楽を貪りはじめた。いまだ乳液を出せずに苦しむフレアとは対照的に、射乳を果たしたマダムの乳房は、心おきなく悦楽に浸れる。
「ああ、はふうっ、だ、だめですわ……」
一度力を失った肥大乳首が、刺激を受けて、再びフレアの胸の中で硬直した。またフレアの乳首が大きく押し広げられる。男たちの手で動かされる熟巨乳が、二人分の乳液で充満したフレアの双球を押しつぶし、後輩ヒーローに悲鳴を連続させた。
「ひいっ、くふあっ、んくっ、だ、だめえっ、は、破裂するうっ！」

不気味な男に横を通られる犯罪者たちが、顔を歪めて、口々に業界でも五本の指に数えられる殺し屋の名をささやいた。呪い収集家（カースコレクター）と。

９番を当てたのは、誰だかわからなかった。カードだけが空中を移動していく。どうやら透明人間らしい。

ルーレットの結果に沿って、砂糖の山へ群がる蟻さながらにオフビート犯罪者たちがぞろぞろとステージに姿を現した。

最初にステージに足を踏み入れたライオン男が、よく通る声で吼（ほ）えた。

「さて、せっかくの機会だから、滅多には見られんものにお目にかかりたいもんじゃな」

獣の瞳が、ひざまずいたローズデバイスに止まった。

「その緑色の硬いドレスを、剥かせてもらおうか」

「いやっ！」

静子は自分が男のペニスで貫かれるところを想像して、反射的に動いた。エメラルド色のアーマーが跳ね上がり、足の底からジェットを噴射して空中に舞い上がる。

「いやあっ！」

回転をつづける巨大ルーレットの映像に、ローズデバイスが重なった。直後に、頭上から暗緑色の軍服に飛びかかられ、太い腕で羽交い締めにされる。一瞬前まではステージに

立っていたメジャー・ライオンが、いつの間にかネオアリーナの天井に上っていたのだ。
胸の装甲を、赤土色の両手につかまれる。少女の身体と一体化したアーマーから脳に伝わってくる異変が、静子を叫ばせた。
「嘘！　あたしのアーマーが、ああっ！」
いままであらゆる兵器と闘い、改良を積み重ねてきた特殊合金の重層構造が、腕力だけで紙のように引き裂かれ、破片がきらめきながら下へ落ちていく。静子にとって、痛みこそないが、自分の肉体の一部をはがされているのと同じだ。薄い胸に直接着ている特殊な黒いボディスーツが、背中にいる獣人の瞳にさらされる。ライオンの口が傲慢に吼えた。
「世の中は広いということじゃよ。わしは世界最強の傭兵部隊を率いておる。これくらいのことができんでは、部下にしめしがつかん」
アーマーの足首を、裸足になったライオンのつま先に蹴られた。一撃でジェットの制御機構が機能を止める。ローズデバイスとライオン男はひとつになって、ステージへ落下していった。
暴れるローズデバイスを抱えて、獣人がたてがみをなびかせ、ステージに着地した。二人分の体重で、かなりの重量になるはずだが、まったく衝撃を受けた様子はない。
ローズデバイスは人形のようにシルバーバレットの前に降ろされ、強引に四つん這いの

姿勢にされた。静子の目の前に、再び勃起が突きつけられる。
オセロットが牙を剥き、背中の毛を逆立てて、自分と同じ猫科の獣人を威嚇した。
「やめるミャア！　ローズちゃんには手を出すんじゃフギャアア！」
オセロットの背中に、どす黒い色をした日本刀の刃が突き立てられる。刀身が深々と体内に入りながら、一滴の血も出ない。
「イ、イタク、ナイノニ、カ、カカ、カラダガガ、シシシビレ、ルルミャアアア……」
四つん這いになったまま、オセロットの全身がガクガクと振動した。しっぽが床の上でのたうちまわる。
黒い刀の柄を握った殺し屋カースコレクターが、嬉々とした声で告げた。
「腹心に裏切られ、眼前で妻と娘を犯し殺された武将の怨念がこもった呪いの刀だ。本当なら刃に触れただけで狂死するところだが、俺が呪力を抑えているから、胴体が動かなくなるだけだ。女ヒーローの肉を楽しませてもらうぞ。痺れを消して、たっぷり感じるようにしてやるから、おまえも楽しめ」
カースコレクターがパンツのファスナーを下ろし、勃起した男根を引き出した。なんと肉竿や亀頭にも、頭に宝石がついたピンが何本も刺さっている。これもまた呪いのかかった品物なのか。

やわらかい獣毛に覆われた秘処を、釘や鋲が並ぶ手によって荒っぽくかき分けられた。豹柄の中央がほころび、ピンク色の肉が現れる。

粘膜はまだ濡れていなかった。肉体を改造されているか、媚薬や魔法の淫具を使われなければ、こんな凄惨な状況で愛液が出るはずもない。それでも、前戯を施されれば、膣を守るために分泌されるだろう。

しかし、なんの愛撫もないまま、凹凸のついた怒張が、オセロットの中へひと息に奥まで押し入ってきた。

「ギャアアアッ！　痛いっ！　痛いミャアアアッ!!」

オセロットはたまらず絶叫した。肉棒が前後するごとに、体内の奥深くを硬い金属でえぐられる激痛が破裂して、悲鳴が止まらない。それはもう人間の声ではなく、手負いの野獣の叫びだ。背中の刀の呪いがなければ、ステージ上をのたうちまわっているだろう。

連続する苦痛の声を、殺し屋は顔に陶酔を浮かべて聞き入っていた。うっとりして、腰を激しくピストンさせている。

「おお、いい声だ。天上の音色だ。気に入ったぞ、オセロット。呪具の力で、膣に傷はつかないから、たっぷりと苦痛を楽しんで、いい悲鳴を聞かせてくれ」

陵辱者の声も、オセロットの痙攣する三角形の耳には届かなかった。もはや自分の悲鳴

しか聞こえない。大きくなるばかりで、途切れることのない苦痛に、意識が焼け切れそうになる。
痛みに逆立ったオセロットの髪が、カースコレクターに強くつかまれた。
「ほら。シルバーバレットに射精させなくてはならないのだろうが。さぼってはだめだ」
女の部分を貫かれながら、唇をシルバーバレットの男に押しつけられる。
「アガッ、ングッ……」
「カースコレクター、やめろ！　おまえのやり方は、あっ、あうう……」
オセロットの顔が上下に動かされ、唇での奉仕を強制される。どんな状況であっても、シルバーバレットのペニスは肉の快楽を紡ぎ出してしまう。
「……ウグウッ、ガッ、グウウウ……」
「ひっ、あ、あふっ……だめ……」
苦痛にうめきながら犯されるチームメイトの姿を間近にして、ローズデバイスは背後に首をひねり、自分を押さえつけているメジャー・ライオンに懇願した。
「ひどすぎます。オセロットがかわいそうです。セックスをするにしても、こんなやり方はやめさせてください」
「何を言う。陵辱される敗者の泣き声こそ、戦場の醍醐味じゃよ」

ぐっ
ぐっ

「そんな」
「当然、きみも泣くんじゃよ」
ごつい指に生えた爪が複雑な設計図を描くように、静子の腰を守る装甲の上で精密に動いた。少女の肌を傷つけずに、重層金属と薄いボディスーツだけがきれいに切断される。
「いやっ！」
スーパーヒーローのローズデバイスの内側から、男を知らない少女の白い尻が現れる。恐怖と嫌悪に震える股間をターゲットにして、遠慮も思いやりもない野獣の巨根がミサイルのように突進していく。
「いやあああっ！　フレア！　フレアッ！　助けて！　痛いいっ！」
オセロット同様に乾いた粘膜のトンネルを、人間離れした赤黒い砲弾が引き裂いていく。かつての静子の身体は、亡父の調整のために痛覚の感じ方が通常の人間よりも低くしてあった。しかし、フレアとの初体験のとき、処女喪失の痛みを感じられなかった自分に疑問を持ち、自身で痛覚を常人なみに変えたのだ。
そのことが、いまや大きな不幸となっていた。準備の整っていない女性器を、凶悪な巨根にえぐられる苦痛に、華奢な全身が砕けそうだった。
「痛い、痛いよう、お願い、助けて」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

コミックUNREAL アンリアル
COMIC

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー！

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月発売！

敗北乙女エクスタシー
Defeat Maiden Ecstasy

あなたのキモチイイをお手伝い！キルタイムのアダルトコミック誌

電子書籍版も好評発売中

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中！

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

二次元ドリームノベルズ

異世界シャイニングテラーシャ

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

女刑事美優
暴漢は白昼の路上で

リアルドリーム文庫

「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターンノベルズ」
から書籍化！

姫騎士がクラスメート！

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

異世界でチキる妹

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないエッチ系レーベル

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

ドキドキラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキ★ラブ！

ザ・ハイスクール・ヒーロー

二次元ぷち文庫

二次元ドリーム文庫

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索